

「多様な学び」大学が本腰

学校以外で学ぶことについて、大学の教育系学部などが科目や講座として取り上げる動きが目立つ。スクールソーシャルワーカー（SSW）として家庭環境の問題に対処したり、リースクールのスタッフとして子どもを支えたりする人材へのニーズが背景にあるようだ。

リースクールから講師

東京学芸大教育学部に今春、「多様な学びと子ども支援」という科目ができる。7月まで計15回、2単位の科目で、リースクールのほか、体と心の調和を大切にするシュタイナー学校など、法律で言う学校とは異なるオルタナティブスクール（もう一つの学校）についても学ぶ。

リースクールの草分け「東京シューレ」を1985年に開設した奥地圭子さん（74）が非常勤講師を務める。「学校教員を養成してきた大学が多様な学びを取り上げるのは画期的。まずはリースクールや不登校について多くの学生に知ってもらいたい」と話す。授業では、フリー



東京学芸大
NPO法人東京
シューレ理事長
の奥地圭子さん

スクールの生い立ちや社会的な役割について説明するほか、シュタイナー学校やサドベリースクール、外国人学校などのスタッフらも招き、それぞれの実践について話してもらう予定だ。

社会福祉士の資格取得を目指すソーシャルワークコース（1学年20人）が主な対象。SSWを卒業後の進路の一つに位置づける。専門家や住民が教員と協力し合う「チーム学校」の実現に向け、拡充が見込まれる職種だからだ。

このコースで新科目開設にかかわる加瀬進教授は「学校は不登校をなくすことに価値を置くが、ソーシャルワークの基本は

子どもの最善の利益を守ること。選択肢が学校以外にもたくさんあることを、一つの科目を通して理解する意味は大きい」と話す。

国立大の教員養成学部のうち、教員免許取得を目的としない「ゼロ免課程」は意味合いが希薄だとして廃止し、見直すべきだとの方針が2013年6

子どもも支える人材育成

大阪府立大は2009年度、全国で初めてSSWの養成課程を始めた大学の一つ。課程を置く

教育福祉学類ではこれまで、オルタナティブスクールやリースクールに関する講座を金曜夜や週末に年20回以上開いてきた。学生や教員のほか一般も聴講可能だ。新年度からは「多様な学びセミナー」と銘打って、回数もさらに増やす予定だ。

担当教員で副学長の吉田敦彦教授は「文献を読むなど理論も含めて学べるようにする。リースクールのスタッフを養成するニーズにも応えたい」と話す。

早稲田大文化構想学部には、「子ども支援」の名を持つゼミや科目がある。子どもの自己決定を尊重するという考え方に立

月、文部科学省から示された。こうした動きを受けて同大がゼロ免課程を改編、15年度に設けたのがソーシャルワークコースなどの教育支援課程だ。

「教員を目指す学生とSSWを目指す学生が一緒に受け、学校やリースクールについて議論できたら」と加瀬教授は期待する。

いけるよう支援していくことが社会的に要請されている」

吉川恭平さん（27）は、喜多教授のゼミを卒業し、宮城県石巻市子どもセンター「らいつ」スタッフとなった。子どもの権利を柱に子ども参加の視点で運営する児童館だ。不登校の子の実情は大学で学ぶまでほとんど知らなかった。「ゼミでの学びで、子どもへのアプローチはさまざまだとわかった。今の大学生も関心を持って勉強してほしい」と後輩にエールを送る。（片山健志）



リースクールのスタッフらを東京学芸大に招いて開いた公開研究会。こうした活動が科目新設につながったという。2013年、東京都小金井市、加瀬進教授提供

に気づき、自信を持って生きて